シナイ半島へ

朝　五時半　カイロのプレスセンター前に　百五十人の外国人記者たちが集まった。イスラエル兵とエジプト兵の遺体交換がシナイ半島で行われるという。第四次中東戦争後　はじめての　シナイ半島公開取材行だ。ザラ紙に包まれた　上下かみあわない紙箱を手渡される。エジプト人から物をもらうことに慣れない人々は　早速　中味を　あらためる。鶏足のローストロングレタス二枚　パン　ジュースの缶一個　箱の中でいったりきたり　音を立てる。弁当のつもりだ。サービスという言葉を受け身に解釈している情報省の人が　弁当を出すというのは　何事かあるに違いない。おまけに　数も　この早朝に間に合っているというのは　かなりの力の入れようだ。砂が熱をもって　騒ぎだす前の　清冷な空気を切って走り抜ける砂漠のバスの旅。乗っているバスがエンコしても　これだけ世界の記者がいれば　国がなんとかしてくれそうな　安堵感。黄土色の世界に　空の青さと　バスの赤いペンキが色で　風紋と砂の起伏の表情が唯一の景色。大男　小男　黙々とし　お互い　話しかけもしない。北ベトナム　南ベトナム　南朝鮮に北朝鮮。イスラエルの敵が　ナチス・ドイツならその友はエジプト。ヨルダンの記者にスパイ勧誘を猫なで声でするＫＧＢ銀行員の名刺を刷ったＣＩＡ　イギリス人にフランス人　世界の病原菌と思惑は　各種とりどりで　同じものはザラ紙で包んだ鶏の足の弁当とシナイに入る期待。モーゼの杖のかわりに　スエズ運河にかかった浮き橋を　バスから降りて渡る時　ゆれる　足の感触に　世界の病原菌たちは　やっと子供じみた活気をみせる。破壊されたスエズ市の町並みには　呼吸一つ乱さず　通り過ぎたのに。不発弾いっぱいの運河を渡りきれば　シナイ半島。バスが再び走りだすと　こっけいな程　砲の方向が　好き勝手にむいている　焼けただれた戦車がみえる。日本の子なら　アニメの模型の拡大版というかも知れない。カイロのゴミの町の鉄屑屋なら　舌なめずりをするだろう。しかし　どっこい　ここは　ミリタリー・ゾーン。カメラのまわる音が充満する。砂漠に同化してしまったテントの影

は　エジプトとイスラエルとの停戦ライン。ひからびたこはだのニギリみたいに　砂の上に丸まっている行列で　イスラムの祈りの時を知る。立ち上がった彼等の顔をみて　一瞬　度を失う。アラブの顔でなく　みな東洋人。国際監視軍のインドネシア兵たちだ。ゴム跳びの紐みたいなのが停戦ラインだという。砂の中から湧くように　エルサレムからやってきた　イスラエルからの外国人記者団の群れが　紐の向こうに対する。騎馬戦がはじまる訳でもなく　そんな馴れ合いの緊張感もない。兎に角　皆　しがらみの外の外国人記者たちだから。摂氏五十度にもなるだろうか。炎がのぼるような熱気の中　裸木の棺が　三十数個並べられた。ドライアイスというものがエジプトにあっただろうか。イスラエルには？　棺の中味は？　慣れないチンドン屋の音に似て　崩れてしまいそうに　両国の国歌が演奏される。音楽会じゃないんだ　儀式なのだからと　私の激励に頓着なく　機敏に動く　イスラエル兵は　次々に　ダビデの星の旗を　棺の上にかけていく。布一枚というか　国家の印一つで　仏様に面目が立ったように見える。本当は　目に見えない停戦ライン上。エルサレム発とカイロ発の外国人記者たちは　仲間や知人を見つけると　祭りのあとの気抜けのせいか　兵隊の制止も　なくなり　本物のゴム跳び遊びよろしく　跳び交い　抱き合っている。帰路のバスに乗った記者たちは　一仕事が終わった気楽さか　お弁当のジュースがきいたのか　各国流のなまりのアラビア語で　運転手に　バスを止めさせた。万国こぞって降り　各人　陣地　をとると　盛大に　用を足す。あとは　カメラを抱えて　眠りこける。夕日を背負って　ナイル河畔のプレスセンターに着いた時　シリアと　スペインと　日本の　三人の女性が　封を切らなかったジュースの缶を　そっと　見せあった。お弁当をもらった瞬間　ノー・トイレット・サービスを予感し　骨まで乾く　シナイ行きを覚悟し　平然としていた三人。缶を見せあうだけの乾杯。異国なでしこを知った　私の特ダネ。